心中刃は氷の朔日

近松門左衛門作

上之巻

さりとても戀はくせものみな人の、地金をへらす燒釘は、敲き直いて異見して、燒直いても惡性の酒と色との鑓や。煮ても燒ても嚙れぬは、鐵橋あぶりこ鐵火箸。其くせ細工は器用にて、精さへ出せば二人前、せねば釘貫拔ていく。讀書かな文鐵挾、とかく萬能一れん物、鐵鎚こたへぬ糠釘で、後は吹あげ鞴ふく、歌鍛冶屋のてこの衆、てつからりころり、ちんからりちんからり、ちん〳〵からりと打あげて、帳面計合に合鎚、いかな打出の小槌成共、續くべき樣なかりけり。弟子子大勢遣ふ身は、油斷させじと旦那から、灰まぶれなる灰ねこの顏振上て、主人「ヤア虎が涙のしるしが見へて空が曇つた。五月廿八日、雨三つぶでも降ねばをかぬ。かよや子供が不動參り、氣の毒や雨に逢ふ。仁介でも長三でも、ちやつと笠持て走れ。大降がするならば、おつまが帷子濡そふより、八

さりとても云々―どういふても戀はよくないもの　地金云々―主人公平兵衛の本性を屬らして如何程異見しても酒と色に引かされて直らぬ　鐵橋―着炙るもの　あぶりこ―金綱せねば云々―せぬといふと手間を拔いて遊ぶ　萬能一れん―萬能一心にかけた

分ぐらゐで駕籠をかれ。かゝにも足袋をぬぎやと云へ。雪駄を腰に挾む共新しい紙遣ふまい。釘包んだ古反古一二枚持ていけ」と、そこ〳〵氣のつく職人の、金でかす氣ぞ各別なる。弟子共は不請顔「雨が降ふが雪が降ふが、平兵衞の供からは氣遣は御座らぬ、堂島新地蜆川、茶屋くら屋煮賣屋で、鍛冶屋の大臣平樣と、誰知らぬ者もない平兵衞殿。笠の五本や十本を借かねは仕やるまい。私等が持た傘では、お山衆の濡かけは堪るまい」とて動かねば、親方利右衞門「やいこりや〳〵。又しては己らが謗りはしりに兄弟子の中言を云ひをるか。アノ平兵衞めは是の見世を任せる程の久しい者。なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない。平兵衞が眞似したら汝等あてが違はふぞ。同じ樣に己等が文の使ひも仕をるけな、連立たも知て居る。あの邊は人を釣る甘い餌に喰附、お山の味を喰覺えたら、夫限りに追出す」と苦々しく云ひければ、長「いゐ〳〵私や文持てたつた一度。仁介は先度も連立てお山喰ふて來たけな」七「エヽあの人の嘘つきやる。己がどこに喰ふたぞ」長「チヽわがみ先度云やらぬか。ほん山寺の開帳から平兵衞殿と新地へいて、喰ふて來たとサアなんと云やらぬか」七「わあいそれはの平兵衞の茶屋へ連ていて、旦那樣に云ふまいなら甘い物喰はせふとて、主は奥の座敷でお山を喰やつたそふなれど、

り、先の平き鉾を萬能といふその一對なり（俚言集覽）

被釘云々―說論も聞かぬ浮氣者となる

てこ―技に堪能なる職工、之より鍛冶屋の有樣を述ぶ

合に合槌―帳面を胡魔化して都合合す

灰猫云々―亭主が灰だらけになつて働いて見せる

虎が雨―慶久四年五月廿八日曾我祐成殺され其妾虎懇嘆の涙を流し、より其日には必ず雨降ると云ふ

金でかす―金溜る

くら屋―曖昧屋

濡かけ云々―濡を防がれぬ、も

めいよ―不退轉、鰻は精を增す故云ふ

とつて置―餘所行の衣裳

こなたの近所―畑近所

手があけは―遊べば口が干上るとゝ―をつとさま―内義樣

櫻の丸―紋所

私は端の上り口で鰻の蒲燒ばつかり、お山は口へも寄せなんだが、めいよな鰻といふ物は、喰へば喰ふ程お山が喰ひたふなつてくる。鈍な物じや」と笑ひける。親方も返答を他へそれたる鎚の音、てん〳〵天氣も照降雨に五十餘りの女房の、とつて置をば濡さじと、「嬉しや此方そふな」とて、走り込しは、主人「誰でござるぞ何方からぞや」女房「ハア、御免なりませふ。大文字屋の利右衞門樣とはこなたか。北野鐵鎚煎餅三郎兵衞と申者の女房、こなたの若衆平兵衞殿一寸呼び出して下されませ」主人「ハア、中々や。平兵衞は今日かかや娘が不動參りの供をして、こなたの近所へ往たが今に戻ろふ。煙草でも呑で待つしやれ。茶進ぜや」と云ひければ、女房「ア、お構ひなされますな。平兵衞殿とはふとした緣で念比に致しあひ、今では親子同前。とふに内方へもお禮に參る筈なれ共、夫婦の手ばつかりの商賣、手があけば口があくで自らの御無沙汰。今日は平兵衞殿に用ついで、おゑ樣にもお目にかゝらふと存じ參りました。是はとゝの手燒の鐵鎚煎餅、さまに進ぜて下さりませ。皆平兵衞殿の傍輩衆か。暑い時分に熱い仕事、御太義でござんする。あれあれ辻迄平兵衞殿お供して見へまする、おゑ樣そふな」と云ふ所へ内義娘平兵衞が、差掛傘の印にも新地平野屋墨ぐろに、櫻の丸の花の露、花の雫もなまめきて、人々歸れば

主人「ヤヽ戻つたか、雨にあふて氣がせかふなあ」妻「いや〳〵平兵衛の近付多ふて傘借たり休んだり、ゆるり〳〵と蜆川の新地を、おつまに始めて見せました」と、語ればおつまも、「なふ父樣、平兵衛の案内で美しいお山衆をたんと見て來ました」主人「ヲヽそりやよい慰み一段々々。北野の煎餅屋のお方、平兵衛に逢ひたいと、先にから待てじや。噂土産が有禮を云や。煎餅屋殿も先づ内へ」と、亭主は奥に入ければ、女房「アヽおゑ樣でござりますか。今日は宿におりましたら、澁いお茶でも上ましよもの、お殘りおほや」と挨拶す。妻「さればの事、平兵衛の念比とかね〳〵咄し家も知てゐまする、重てから寄りませふ。あれみなおこどの時分じや。サア先づ内へ。それ平兵衛馳走しやや」と人あひよく、皆々奥へぞ入にける。平兵衛あたりを見廻し傍へ寄て小聲に成、「なんとしてござつたぞ。今日立ながら平野屋で、小かんにちよつと逢ふたれば、物案じ顔して、今夜中に是非共ちよつと來て下され。ひよんな事ができました、と跡先もなふいふたれ共、供の事なりや二言と聞かず、おふといふて戻つたが、どふしたいはくじや氣遣ひな。萬事こなたを頼んでをく。何事ができたぞ」と、恨み顔にぞ見へにける。女房も早涙ぐみ「ヲヽ、道理、去ながらつい云ふて濟ぬ事。せかずと樣子を聞かつしやれ。今迄はわしが身

もか方―もかみさん

重ねてかち―此次かち

おこど―賞飯、供餉の轉（俚言集覽）

ゐふ―應

いはくゝいはれ

鷹匠頭—鷹一切の事を司る役人の頭　そらし—逃がし　きじやく—癪氣　大阪三郷—南組、北組、天滿の三處（國花萬葉記）　かゝが氣色—女房の病氣　尾—破綻

を、小かんの肝煎取次のと、こなたへも祕したが、眞實はわしが姉の子現在の伯母姪。父親は播磨で鷹匠頭の奉公人。五十石に五人扶持、二本指た人の子なれ共、親ごぜが殿樣の御祕藏のお鷹をそらし、お氣に違ふて浪人し、あの子計を大坂へ、伯母を便りに何方へも仕附て呉れと登されしが、折節悪ふ不仕合、こちの夫の長煩、やう〳〵本復めさつたりや一昨年の大地震。私はきじやくで床につき、身代どふも立兼、既にかまどを破る處、あの子が私等に隱して肝煎頼み、堀江の茶屋へ三年を十二兩に、身を賣て呉れました。私は聞て目をまはす。夫は男の腹をたて、「身こそ貧なれ大坂三郷隱れもない鐵鎖煎餅三郎兵衛、かよが氣色が本復して、千年百年生よふが、大福長者にならふが、女房の姪に身を賣らせ其金取て立物か。腹を切る」とて喚かれたを、可愛やあの子が涙を流し、「伯母樣許して下さりませ。國の父樣母樣が浪人でなければ、こなさん達へみつきの筈。其ならぬが悲しさに、私が身を捨ました。他人でも有ことか、伯母は親のかたはれ。こな樣達計じやない。國にござる母樣への孝行と思ひます。伯母樣を母樣と私や思ふてゐまする」と、病ほふけた伯母に抱付て、聲をあげて泣やつた顏、今に忘るゝこともない。其蔭で人參の百服餘りも飲だ故、病の根を拔此樣に身代の尾もみせず、暮すは小

如在―よい加減に

おつや様―小かんの幼名

こちと―我等

あだて―あてど

かんの孝行故。こな様元は知らぬ人、小かんがいとしがる人と、云ふて互の念比あひ。命を助け身を助け姪ではなふて親じやもの。如在にせいと云やつても、私等に如在はないものを、恨みが結句で聞へぬ」と、邊りを忍びしく〳〵と、泣くどきてぞ語りける、平兵衛手を合せ、「餘り氣遣ひ切なさに恨みらしい詞つき、眞平〳〵御許し。こなたを伯母御と云ふこゝとも、小かんがいふて知つてゐる。先此度ひよんな事できたといふが氣遣な。落つかせて下され」と猶氣をせくこそ道理なれ。伯母「ヲヽされば、いの。内々國の親ごぜへ、茶屋奉公はかくして、大坂の脆々の奥様へ預けた分。所に今度小かんの兄御、殿様より呼返され、御奉公にありつかれ、それ故あの子を國で縁につけるとて、乳母の息子の乳兄弟が、昨日の朝おつや様迎ひにきましたと、幼名いふて登つて安治川に宿をとつてゐる。こちと夫婦は當惑して、様々思案して見ても、今で請出すあだてはなし。恥を捨てていふたらば、國の迎ひが藏屋敷で、つい銀を調へ、國へ連て歸ふし、時にはこなたと縁切れる。どうした物で有ふと、小かんに問ふて見たれば、いとしやあの子も泣入て、「國へ歸つて親達の顔も見たふはござれ共、平様に一寸も離れふとは得云ひますまい。叶はぬ首尾に極つて、國へ下るが定ならば、私は見事に死まする。伯母様を賴みま

ひき日―女郎の休んだ日、

是程しき―此位の事

しやちち云々―めちやくちや

あぢな商云々―うまい商賣巧んで

ほうはつち―頬べた顔の謂、どちらへ使ふも同じと也

す、國へ遣ずに平樣と長ふ添はせて下され」と、歎くもいとしし道理なり。恩を受けた大事の姪爰は一つと思ふても、手わざにいかぬは銀事。國の迎ひは早ふといふ、あの子はどふじやと氣をせきやる、詮方つきてこな樣と談合に來ました。三年を十二兩、一年半は勤める、殘つて半銀六兩なれど、ひき日の何のとてつきり七兩は入ませふ。私が方で二兩二分は身の皮剝でも調へましよ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して、こな樣と疾から夫婦にしたといひなし、國へ遣る共夫婦づれ、婚入させて濟せ共、其四兩が見へぬ故、大事の姪が望みも遂ず、死に生も出來かねまいと思へば胸も塞つて、今朝はおもゆばつかりで何も喉が通らぬ。是程しきでこな樣へ身代打明け咄すこと、恥しい口惜い無念にござる」と、手拭も絞る計に泣居たり。平兵衛はあと吐息をつき、「はて扨思案に行あたつた。私も近年彼故に旦那の懸錢も何もかもしやちらさんばう、近付中に痛手を負せ、動かれぬ身になりし故、少借錢を輕めん爲、あぢな商ひからくんで、三兩餘りは今日明日に請取筈の約束。はてほうはつち、此銀を請取次第遣ませふ。二分や三分の足ぬ口、夫は其時どふもなる。何とぞ首尾して、小かんを手へ入れる樣に賴みます。國へ下るに極れば、此平兵衛から死にまする。二人の命を助ける慈悲本の後生に成

ませふ。伯母様偏に頼みます」と、又手を合せ泣ければ、伯母「いや頼む事ではござらぬ、私が身に掛つた事。其銀さへ調へば何の案ずる事もない。ちつと胸が開た平野屋へも立寄て、小かんに云ふて落つかせふ。そんなら早ふ歸りましよ。内方へもよい様に」と出れば、平「是々此傘小かんに返して下さりませ」鳥「なふ〳〵是は幸」と、差て出たる傘や、とらが涙も引かへて丑天神ののべの露、消ゆる間近き三重命なり。見送る道もしみづきし、草鞋に編笠の田舍商人二人づれ、「ヤア平兵衛殿いかい暑さでござるの。誂へ物共出來ませふ、今日請取て銀も濟し、明日下り度ござる」と云ふ。平「いかにも〳〵上物は皆出來たが、急な細工が支へて中から下の竝物が揃ひにくい。銀を先請取て出來次第に跡から下しませふ。銀を持てござつたか何程持てござつた、四兩あしもござるか」と、そぞろに高をぞ聞たがる。鳥「いや上物さへ出來たれば竝は遲ふて大事ない。誂の分算用は今日殘ず仕切て」と、腰のうちがひ取出し、「先度手付に一貫文渡し、今三兩三分、相場は金六拾目、錢十五匁合二百四拾目、しかけの代に引がない、こなたの方には是が德。ちよつと一筆請取して出來た分下され」と、いひも仕廻ぬ半分聞、三兩三分につかみ付、平「是でざつと濟みまする。まあ二分や一分は伯母がとふぞ仕やりましよ」と、我計合

四兩あしし—四兩以上

うちがひ—帶袋

相場は云々—金一兩の相場は銀六十目と錢十五匁なれば三兩三分で二百四十目となる（貨幣秘錄）

しかけ—殘しか

けるてゐ代物

あはぬ—向か

いや〳〵茶云云—商人は嶽多なる故遠慮して呑まぬ

光の間云々—電光石火に寄す、忽ち嶽多の身の上を知らる

點の、數もよむやら讀ぬやら懷中に押入れ、「請取でも手形でも起請でも、仰付られ」と硯紙取出し「是旦那樣、上物の裏金二千足戸棚に有ふ。取出し下さりませ」とぞいきりける。亭主は裏金束ねながら持て出「平兵衛が咄で聞ました。大和の雪駄屋殿は各で御座るか。是はあはぬ細工、私が聞ば請取るまいに、平兵衛が在所から、念比中じやと申てどこでやら請取た。重て斯は成ませぬ。それおつまお茶進じや」「あい」と返事も色づぎしあかゐの茶碗手にすへて、っま「出花一つあげましよ」と差出せば、甲酉「是は〳〵忝い」と取らんとせしが、「いや〳〵お茶はたべますまい。御無用になされ」と云ふ。っま「お前はいやならお連樣」乙酉「いやわしも御免なれ」っま「平にお一ッあがりませ」「何しにお辭義申ましよ。兩人ながらお茶は得たべませぬ」っま「そんなら白湯でも上ましよか」酉「いや〳〵所望に御座らぬ」と、いへばおつまも打笑ひ「ハア愛想もないことや。こりや仁介、煙草盆持てこい」とて入にけり。仁介が奥より煙草盆、鍛冶屋炭火のおこり立、有る火はをいて懷中より火打に火口打出し、煙草のむ身は石の火の、光りの間をも待かねて身の程知らるゝ墓なさよ。亭主是に心付「何も大和のお衆と有。奈良郡山左手右手、吉野郡の奥迄も雪駄屋衆は皆存じた。御兩人の御在所は、何方」と問へど聞かぬ顔。あち

らへすべらし紛らかし、只名所を隱すにぞ。平兵衞も親方に根問させては惡かりなんと平「サア請取は仕廻たり、渡して早ふ戻しましよ」と、取らんとすれば亭主押へて、「イヤ此商ひはせまいはい。かね請取たら早戻せ。始聞けば請取らぬ。あの衆は大和の金銀たんと持た村の、牛馬迄持つた樣、あの衆の誂へ物、此利右衞門は請取らぬ。我等が家職に疵がつく、勿體ない」と搔さらゑ、ひん抱へて奥へ入。平「先待つしやれ　夫では私が立ませぬ。損のいく細工でなし、銀に一厘不足なし、手付取て手形して、渡す段に變改して職人が立ますか。樣子があらばある迄、それなら私が内證の自分仕事にしませふ。時には家に難つかず、疵が附けば平兵衞が疵。渡さねばならぬ」と取付く所を突こかし、はつたと睨で、主人「うつけ者、疵が付ば平兵衞が疵とはどの口でぬかした。此利右衞門が目代にして、弟子手間取をも引廻す己に疵を附まい爲よ。京御所方の御普請の、下細工の釘請取、火水を清める最中に、正しふもない銀を取、伴ひつきあふ己が先いきせふと思ふか、冥加があらうと思ふか。五兩に足らぬくさり銀、寶の山と惜みをる、根性の甲斐なさで商賣がならふか。けつく丁稚の時分には、人にも成らふと思ふたが、エヽごくに立ぬ根性」と、涙を浮め齒ぎしみし、「向ひ隣へ聞へぬ中、銀を戻して去せをれ」と、

目代―名代
己が先いき―我儘惡先を廻つて利を得る事
ごくに立ぬ―役に立たぬ

怒りけるこそ尤なれ。平兵衛至極につまれ共、懐中の銀に離れ難く、平「よふござる。今の間に私が打てやる。地鐵は後で算用」と、横座に直つて足鞴、地鐵打くべ吹たてく、「丁稚ども傍輩のよしみに相鎚ひとつ打てくれ。平兵衛が一生の恩に受ふ」と頼め共、親方の顔色みて、誰か詞の相鎚さへ打者とてはなかりけり。平兵衛恨み泣き、「エヽそふはせぬもの聞へぬな。うぬらがくたびれ眠たがる時には、己が代りをして二人前を働らいて、宵から寢させたり休ませた恩德を忘れたな。よい頼まぬをきをれ。裏鐵の千足や二千足、平兵衛が片腕半日の仕事に足ぬ。親方傍輩ひとつに成て、此平兵衛が一分すてさせ、此首尾なら死ふも知れぬ、死だらば此一念己等が首引拔て」とてこく〳〵とつてらこく、とてこく〳〵と打鎚に、落る涙もこぼれそひ湯玉とたぎる計なり。親方土間に飛でをり、鎚鐵挾取て投げ、「朝晩清める鐵床に涙をかける罰あたり」と、鎚の柄をおつ取直し胴骨を四ッ五ッ、たゝき付く、「己が敵は此銀」と、懐中に手を押入、「是銀を返せば云分ない。此方には請取らぬ、どこぞ外で誂らや」と、投返せば二人の者、詮義無益と思ふ顔、再「手付の一貫覺えたか。平兵衛重ねて取に來る」と、云ひ捨てこそ歸りけれ。平兵衛わつと大聲上、あたりも恥ず歎きしが、「去とては旦那殿、舊功なした育立を、可愛

ぬきをれ—ぬきやがれ

舊功云々—年功ある子飼の屋人

が定か憎いが定か。只今のお詞は、弟子子不便な云ひ樣で又此仕方は平兵衛に、首くゝれとのなされ樣。鍛冶の道一通り、火を淸めるといふ事は、商賣なれば知つて居て、其上でする商賣。一旦はさも有れ、一生主に逆らはず詞一つ返さぬ此平兵衛が、是程迄逆らふて申からは、身拔のならぬ譯有と、大目に見て下されて、其御恩を忘れる平兵衛めではなき物を。但し銀を引こんで損懸ふとの氣遣か。年の切は去年明、身を質に置からはお氣遣はない事。平兵衛が身一生、生る瀨か死ぬる瀨の、大事の銀に行詰り、やう〳〵大和の宿村が、誂物を天のあたへ、時の間を合せたく、奉公して十八年目始めて旦那に叱られ、あたはぬ身にはあたはぬ金、命を捨つるも世のならひ、それに悔みは殘らね共、額に毛拔もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆、道行く人、友傍輩も見るぞかし。丁稚小者をする樣に、曲もない打擲き、脊骨は折ふが碎けふが、打たるゝ鎚は痛ふない。あはれを知らぬ親方殿、見て居て打するおゑ樣やおつま樣の情ない、お心の鐵鎚が身節にこたへしみ渡り、いたひ悲しい恨めしい」と泣ひては恨み、恨みては我身の科を悔み泣き、色に迷ひの心の闇、押量られて不便なり。親方彌々腹をたて、「鹿を逐ふ獵師は山を見ずとは己が事よ。お山狂ひに眼がくらみ、人の理非も身の上も、一寸脇が見えぬよ

あたはぬ―與はちぬ
額に毛拔―男をつくる
鹿を逐ふ云々―諺、女に夢中になつて他を忘れる

な。己が身の立ことならば、彼等に商ひする迄なく、五百目や六百目は此利右衛門が出しかねぬ。遣ふてもく止りの知れぬ悪性金、氣儘にさするは汝が身に毒飼と云ふものよ。内外の者も町衆も、三人寄れば己が評判、聞て無念な親方の心の内を推量せよ。さきにも仁介長三めが、噂をするを叱りつけ、今で彼等に面目ない。去年の春から際々に、或は百目八十目、懸の算用不埒にて、何時の際か帳面のさつぱり濟んだ事が有。夫のみならず堺筋の絹屋から、紺繻子の女子帶五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁と云ふ書出、覺えが無とて返せども、跡からは持て來る、不思議な事と思ふたに、今日と云ふ今日内のかゝが、緋縮緬の正躰を見屆けて歸つた。ヤレ勿躰ない冥加ない　灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさへ著にくい緋縮緬に、足を四本踏ごんで其罰はなんとせふ。身の行末が可愛ひ」と、聲をあげて泣ければ、女房娘諸共に、「悪ふ聞きやるな平兵衛」と、共に袖をぞ絞りける。罰利生有親方にて涙をとゞめ、主人「こりや平兵衛、云ふて居ては果しがない。今迄の事は皆許す、是から魂入かへ世帶を持て出る迄は、茶屋の見世へもあがるまい、お山と詞もかはすまい、と急度誓文たてふならば此度の金たとへ四兩が五兩でも、今出して取らするがサアなんと」と云ければ　平兵衛飛退り兩手をついて頭をさ

仁藏―仁藏は丁稚の通り名

忌ひ月―正五九月にて今五月なれば忌み慎む旬みしやがる云云―打潰されてもよい

鐵火を握れ―火起請にて罪なき者は之を握りても害なし（武家盛衰記）

まかなひ―つくちふ

げ、「中おゐ様おつま様、旦那様へ詫言して御禮申て下さりませ。道知らず恩知らず大悪人の私に、金迄出して此難義お救ひにあづかること、親も及ばぬ主の慈悲。今日は忌ひ月廿八日御緣日不動の劔に喉笛を突通され、身の家職の鐵床に打みしやがるゝ法もあれ、又や二度悪性ごとふつゝと思ひ切ました」と、涙を流し云ひければ、母親「ヲヽでかしやつたく。それが其方の身の果報」と、皆々悦びほめにけり。親方も機嫌を直し、「流石男じや満足した。此上ながら此方の心の落付ため、誓文の證據に」と、三尺ばかりの掉鐵の、夕日の如く燒けたるを鐵挾にて引出し、鐵床にどうど直し、「是は此度禁中様お内侍所の釘下地。此内侍所には日本の神々御ばん有、八萬餘座の神の司の御寶殿、其釘に成黑鐵、今の誓文偽りないと見る前で鐵火を握れ。心に誠ある者は氷よりも冷やかなり。少も偽有者は腕燒けたゞれ落ると云、佛神に嘘はない。其方も發起して、今の誓文立るからは熱いことは有まい、サア握れ」と云ければ、平兵衛色變り、只「はゝはゝ」と計にて跡退りにぞ成にける。女房笑止がり「ハテ爰な人うろたやる、思ひ切たが定なれば鐵火に怖い事はない。但は當座まかなひに金取欺しの空誓文か。去りとは悪い合點。一生の病をぬき、身上の固まる事。さつぱりと思ひ切りや。思ひあふた馴染の中、

皮切―炎の初めにて一番目は熱いが次よりはさもなし

かたられた―騙られた

鹽水―貞觀式に潅鹽水とありて物を清めるる事、霊は穢多の跡を清める

備後町―備後表にかへる事

離れがたない筈なれど、それは一度の皮切。なんぼいとしい戀しいも、身が立ねば叶はぬこと。但思ひ切られぬか、サアいやおふの返事しや。どふぞ〳〵」と手詰になれば、平兵衛顏も心もうろ〳〵と、否と云へば主人の慮外、おふといへば年月の、小かんが情仇と成。思案涙に胸つまり、「なふ旦那樣おゑ樣おつま樣も賴みます。その御返事は私が身に成代つてどうなり共、思ひ分て下さりませ。鐵火は御免」と計にて、かつぱと伏して泣きければ、親方も是迄と燒鐵をつ取り、大地へどうと投げつけ、「エヽ欺されたかたられた。十八年此方、たとへ犬猫飼たり共是程にはよも有まい。半時も内には叶はぬ叩き出せ」と飛びかゝり、胴骨をどうと踏む。情なき丁稚共、柄長の鐵鎚手々にをつ取、目鼻もわかず打出す。平兵衛大聲あげ「假令掷ふが叩かふが、此平兵衛は是の内より外往き所はよそにはない。死ぬる共此内から直に死ぬる」と、駈入を敲き出し、走り入れば敲き出し、なんなく辻へ打出し、打て清めの鹽水や、跡は火を替水を替、表もかゆる備後町、へりも切れはて緣切れて、とこ離れ行三里戀路なり。

中の卷

戀草の種うへんとてかためしは、神か佛の堂島をきて見よとてや田簑橋、夜々を重ねて大江ばし、はしのゆきけた雪ならば、いくたび袖を拂はまし。花のふどきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、青葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てゝ、神祇釋敎戀無常、中にこめたる中町や、其家々の吉野川、流の數の多ければ、よねが情のはなの網、掬ひとられぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身を捨る、人はなけれど取わきて、平野屋小かん一まきは、語るも聞も哀なり。今日は六月朔日の正月納めの紋日ぞと、思ひ〳〵の揚の客、小かんは田舍の侍に、初手は内にて二つめは、濱筋の和泉屋、さが〻許へと出かけたる。女子亭主の譯よしが　穗長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴と春めかす、其かきもちの氷より、涙の氷とけやらぬ、うき身の上こそ無慚なれ。小かん「あれ〳〵勝曼參りの妓樣達、駕籠が戻る」といふ中に、早表まで舁よせて、簾打あけ　妓「コレさが樣。今下向しました。小かん樣爰にか。こなさん參ると云はんしたが、道寄せずにおとなしう　早ふ下向さんした。夫も合點、早ふ逢ひたい人があろ」と、ざゝめき戻る駕籠の數々、衆人愛敬愛染の、るとくも見へて賴もしし。さがもそれ〳〵挨拶して、「松屋丸屋河内屋の、妓樣達も此方の揚で參らせましたが、遲いことや」と云ふ所へ、程なく駕籠を舁入

堂島―綱豈にかく、以下戀詞來て見よ―簑を著てに
大江橋―逢ふに、又櫻の緣に吹雪、梅の緣にみどりの橋と續けたり
法華長屋中町―曾根崎新地にあり
吉野川―よしにかく、花の緣にいひし迄なり
一まき―一類
六月朔日―此日正月の飾餅を下して食す
搗鯛―正月に吊した鯛を今日煮にして食へば邪氣を避く（歲時記栞草）
鮛餅―お鎖を鮛いて冷水に漬けて食ふ故氷餅といふ
勝鬘院―新福水寺の北愛染明王

が本尊、六日朔勝授會を行ふ（園花萬集記）
此方の湯—此方の客が拵錢出して
よいすい—よき
推量
三十郎—俳優嵐三十郎
小憎い—小づちにくい
一げん—初對面
みしちせふ—伎倆を示さう

るよ。さが「皆樣緩りとやらしやんす。道頓堀でござんしよの」蛙「よいすい〳〵三十郎の初日見て、芝居では大酒、戻りは駕籠でむしたてる、熱いこと〳〵。此暑さでは霍亂して、信田森のうらみくず水、一ッ飲しや」とわめきしが、「ヤア小かん樣、こなさんは參らずか。定めし夕平樣と、手を引あふてで御ざんせふ。小憎いことや」といひければ、小かんはつと肝にしみ、小かん「そうした事ではないはいな。今日の客は一げんの田舍の侍。日が暮て見へる筈。それ迄は愛染樣へ參らふと儘なれども、心に大願有故に提灯二ッ紋付て、今日の間に合ふ樣に一昨日から誂へ、今にも提燈出來次第參りたふござんすが、提燈の出來ぬのも氣に掛ります」といふ所へ、提燈屋の息子走てきて、「小かん樣爰じやけな、提燈が出來ました。二ッで四匁四分じや」と云ひ捨てこそ歸りけれ。小かん「嬉しや〳〵さが樣つい參つてきませふ。むづかしながら四郎兵衞殿、此提燈の紋のわきに、書付して下さんせ」といひれければ、料理人は「お易い事、目出たふ一筆みしらせふ」と、提燈あぐれば紋なしに、眞白四郎兵衞與さまし「こりやどふじや。四匁四分で白提燈、氣轉の惡い提燈屋、ちやつと紋を書せて來ふ」と走り出れば、小かん「これ〳〵もふよいはいの。提燈屋に科はない。私が佛にうけられず、願の叶はぬ知らしめ、そふして置て下さんせ。

梅田云々—白張提燈は葬式に出すもの故死んで梅田の墓場へ行く時要ると也　ひじあい—間にあひ

やがて梅田へ行時にどふで要らねば叶はぬ」と、浮世をすねし言葉のはし、一座の妓や下女久三、「仕直に遣たらば、多分晩のじあひにならふ。歸らぬことは悔まぬもの、いふて歸らぬ〳〵。歌　いふてな歸らぬ死出の旅、サア飲懸ふ」と祝ふても、定まる前世の約束を脫れざるこそ哀なれ。平野屋の小めらうが風呂敷包打かたげ、「アヽ熱や」とて走り入り、「さが樣ちとお耳かろ」と耳に口よせ、「内義樣のいはしやんす。アノ小かん樣には、鍛冶屋の平樣と云ふ間夫のお客が御ざんすが、樣子あつて逢せませぬ。晝からちら〳〵此邊で見へまする。門より外へ出しませず、行水もそこで賴ます。氣を付て下さんせ」と、叫き散し歸りけり。小かんはしゞ〳〵聞付て、「さが樣今のは何のこと、平樣の事であらふ。さりとては氣の毒な。先の人は親方持、浮名が立ては職人の、身の爲によからぬ噂、人の云ふは皆惡口、間夫の何のと云ふ樣な、深い譯では更々なし。今でもふつと見へたらば、どこぞでそつと逢てや。此方からとんと埒明て、手を切て退ましよ」と、口にはいひて目は涙、さがは五音で推量し、「アヽそんな事氣に掛て此勤めがなる物か。世間の口に戸をたてゝ、錠おろす其錠鎰は、如何な鍛冶屋の平樣に誂へてもなるまい」と、夕暮近き入日かげ、「お客樣達見よふぞや。行燈の用意しや甜瓜も冷しや、湯もとつ

五音—國子

紙帔―大坂などでは五六月兒童の之を弄ぶ（嬉遊笑覽）

唐團扇云々―以下、鬼頭藤の花、牡丹等は扇の名にて皆嬰兒の所作にかけたり

彼の人―平兵衛の事

淺黃島―淺黃縞

夕顏―源氏夕顏卷の、よりてこそ夫れかとも見め黃昏に仄々見ゆる花の夕顏

てたも。小かん樣もお行水、私も汗を流そふ」と奥に入れば一座の色、「私らも行水してこふ」と、皆々表に出にける。空も凉しき夕風に　はやる今年のいかのぼり、雲に舞鶴とんびいか、から風招く唐團扇、鬼の頭も色里の、うへにあがればたよ〳〵と、しなだれ上る藤の花、誰ふみいかの一結び、其思はくの紋付て、袂すどしき小袖いか、盃いかの品もよく、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか、鰻瓢簞鯰いか、吹ぬ風もつ扇いか、雲をゑどるに異ならず。往來の人も立留る、此内に彼の人の見へよかしと、紙鳶見る顏で表に出、上下に氣をつくれば、梅田橋の西詰に、淺黃島に深編笠、小かん「アアあれそふなが」夕顏の、黃昏たどる覺束なさ。先にも見付て編笠の、下の目遣ひ屆かねば、心の中に招き合、目はいかのぼり爪先は、其方の方へ行水の、橋の詰迄そろ〳〵と、跡の怖さに身も慄ひ、傍へ寄りは寄つたれ共、人目にせかれ抱付れず、小「文、を見てから私が氣は、死んで居るぞ」とばかりにて、泣くにも涙落次第、拭ふも人目つゝましや。男は笠のうちしほれ、「親方も道理の勘當、是以て恨なし。そなたを國へ下さずは、親に不孝の冥罰、行末善らふ樣もなし。下したいも一杯なり、別るゝは猶辛し。此平兵衛が胸一ッで、本國の親達迄嘆をかけ苦をかける、許してたも惡緣じや」と、笠を傾け泣き

打たるゝ杖―譴、他人に撫でちるゝより親の折檻が却て嬉し

ばあやれた―逸巻な

居たり。小かん「あれやう〳〵と忘れて居た物、親の事又云出して泣さしやんす。打るゝ杖も床しいと云物を、拳一ツ當られず可愛がられた現在の親、是は懺悔じや忘られぬ。迎に來たは乳兄弟、顔恰好は覺へねども、親達と思ふて見たけれども、町方に居る分に云成した私が身が、ばしやれたなりで逢れもせず、親の事を思ふやら、こなさんの事思ふやら、心を推して下んせ」と、又さめ〴〵と泣きけるが、「是ではすはといふ時に、國へ心が引されて、未練の出來まいものでもなし。こな樣に逢ひ次第死んでのけふと覺悟をする、髪剃は身を離さぬ。是見さんせ」と、袖口から手を引入て懷中の、髪剃の柄包みながら、男の手にしつかと持せ持添て、「南無阿彌陀佛」と我腹に突立るを、椀取て引たくれば、小かん「こりやなぜに。もふ逢ふことは優曇華、こなさんの手で死にたい」と、叫き口説ぞ憐れなる。平「はて惡い合點な、まだ人立も有中に、思ふ樣に死そふか。其心底に極らば、まそつと爰にさまよふて日の暮るに程はない、人顔見へぬ時分に足を限に何處でも、見事に身躰を竝べたい。ひらに待や」と制すれば、小「おなじくは今爰でちつ共早ふ」と、死神の誘ふ命の墓なさよ。和泉屋には「小かん樣〳〵」と呼はる聲々。平「南無三寶最後の邪魔。去ば」とばかり平兵衛、堤をおりて身を何となすび畑に隱れけり。和泉屋の男ど

優曇華―此花三千年に一度咲く故云ふ

も門に出、「そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらふとした」といひければ、少アヽ仰山な涼がてらに紙鳶見に出た。太鼓鉦がいらふとは朔日早々祝ふて囃ふて忝い。太鼓鉦も鐃鉢も頓ていらふ」と涙ぐみ、跡に心は残る日の影と入つゝ暮にけり。空にたなびく紙鳶、次第〳〵に引下す、中に小袖の絹紙鳶風を含みて下かねしが、糸眞中よりふつゝと切れ、和泉屋の小座敷の軒にひらめき落たりけり。「あれよ〳〵」といふ程こそあれ、紙鳶主大勢引連れて、「囃ひませふ」と駈入れば、あたり近所の血氣者、「それ遣る物か」と走りこむ。道行人は是次手に、お山見べしに込入るを、内の者共押へても、我人差別あらざれば、天の與と平兵衛、群集に紛れ奥座敷の、庭迄どや〳〵入りにける。小かんは見つけ氣をあせる。兎角する間に、漸と、扱ひ詫言たら〴〵にて、紙鳶を囃ふて立歸れば、皆入込の大勢も、殘らず表に出て行く。小かんは男を招きあげ、違ひ棚のづし戸を明け夫を押入、「すはと云ふなら此方から、南無阿彌陀佛と聲かけふ。それを合圖に其髪剃で、私が肋を襖越にぐい〳〵と剜て、うんと云ふたらこなさんも尋常に死んで下さんせ」と、戸を引立て寄かゝり、口に鼻歌心には、彌陀の名號一筋の、紙鳶の糸より猶細く、切かゝりたる玉の緒の、結び續れぬ二人が命、危くも又無慙なり。

鉦鐃鉢―葬式に用ふるもの故假りて自分の死を仄めかす

づし戸―袋戸

吸物―蜆を吸物にするとかけたり

お仕著―挨拶もきなり文句とかけたり

氣が通る―氣が利く

はや家々に行燈あけ、面々約束〳〵の、客も見ゆれば酒肴、吸物にする蜆川、水も色めき賑へり。小かんが揚の侍も一僕連れて、「何とおさが遲かつたか。小かんは來てか」と腰かくる。さが「是は〳〵小かん樣は今朝から待かねて、たんと腹を立てじや。ふられさんすな怖いこと。いざ先奥へ」と伴ひける。小かんは色を曉られじと、「此永い日をうつかりと、よふ待ぼうけにさんした。南か堀江かきつと吟味もしたけれど、剛染が無いだけ許してやる。其代に酒呑す」と挨拶もお仕著の、袂を戸柳に打覆ふ。北野の伯母は二三日、夜も寢ぬ目元とぼ〳〵と、「和泉屋殿は此方か。平野屋の小かん殿をちと呼立て下されい。北野鐵鎚煎餅と云へば合點、頼みます」といひければ、さがも日ごろは薄知の座敷に出てしな〳〵呼き、さが「ちよつと立て逢しやんせ」と、云へども跡の氣遣に、棚の傍も離れがたく、座敷へ伯母も呼がたく、どふか斯かと思ふ顔、客は見てとり「アヽこれ〳〵我等は一見明日は國へ下るもの、お客衆でも苦うない、是へお呼なされ」といふ。小「いや私が伯母樣咄したい事が有。自由ながら其間端へ立て下さんすか。客「何が扨〳〵。咄の時分は立ませふ。近付にも成爲早ふ是へ」といひければ、さが打笑ひ、「粹かな〳〵、當世は田舍衆程氣が通る」と走り出て、「これ伯母樣お客へ斷り申た。奥の間へ通らんせ」

伯母「それなら斯う通りましよ。何れも御免なりませ」と奥の座敷に通りしが、客と云ふは國本の迎の人。伯母ははつとばかりにて、伯母「小かんはあの人見知らずか。あれこそそなたの乳母の子乳兄弟、今度の迎に登つた人よ」小「ヤア知らなんだ恥かしや」伯母いや和女より伯母が恥。此勤さする事國の人に見付られ、最早云分ないはいの」と、伯母姪ひしと抱きつき、聲も惜まず泣き居たり。侍鎭めて「ア、是々少とも苦からぬ事、親御達御浪人とは申せども、國では賤しき業もならず、大坂は誰知らずいか成身過なされても、名字に疵は附ぬとて覺悟の前で登されし。それ故他人は差置て、乳兄弟の拙者が參る事、御内證の恥恥辱承つて能樣に、計へとのお迎ひ、いかにしても此間伯母樣の詞といひ、萬事合點參らぬ故、容と傷り方々を聞合すれば、平野屋の小かんは鐵鎚煎餅の姪の由聞屆け、猶念の爲一昨日表向の御一座、稚顏疑ひなしと藏屋敷にて金調へ、今日晝の間に堀江とやらんの前の親方、平野屋亭主も對談し、本金十二兩相濟し一札取て今宵から、自由の御身に致したり。最早氣遣ひあそばすな。私は乳母が悴和田傳内と申て、家中に若黨仕る。おつや樣と御同年稚名は石松、五ツのころ迄は夜晝お傍に附添ひ、一所に遊び育てられ、七才より男の身は、大身小身隔てなく、奥へ參らぬ武家

人ばし―人をば也しは助辭

の作法。互の顔は見忘れても乳兄弟なり主從なり、私迎ひとあるならば、恥も恥辱も振捨て、御息才な顔ばせ見せて下さる筈成に、お心迄が變つたは少御恨に存る」と、侍泣にぞ泣き居たる。伯母涙にくれながら、「去とては面目なや。何もかも伯母が科、あの人ばし恨みやんな。身を賣せたも我故。此度國の出世に付、下るは其身の仕合なれど、あの人も大坂に思ひあふた方ありて、深い約束のがれぬ中、其方に隱して金調へ、伯母が力で彼の男と、夫婦になして年月の望を遂て遣たさに、身をはたいても煎餅屋、押ば碎ける身代の、そこを見せたる恥しや。此上其方が心入、國へはよしなに云遣て、あの子が大坂で彼の男と、添るゝ樣には成まいか。遙々登つた乳兄弟、能らぬ事を聞するも、皆此伯母が身の因果。世の中の浮沈、子を賣る親は多けれど、姪を賣る伯母は我ばかり。恨しの娑婆の境涯や」と、聲をはかりに泣きければ、小かんも共に涙に咽び、「知ての通り胤腹一つの兄も有、妹もあれどいか成緣にか母樣の、私一人が祕藏子で、海にも山にも譬へられぬ、御恩をうけた此身なれば、明暮逢たさお床しさ、身躰は大坂に殘つても、魂魄は母樣の懷に入てゐる。是程に思へども、なまなか武士の娘とは、薄知に人も知る、免れぬ義理にからまつて、大坂の土とならねばならぬ。其方に任する。兎も角も煩と

氏より育―誘にて教育の如何にて詐とも懇ともなる

鳥は古來云々―胡馬嘶ニ北風一越鳥巢ニ南枝ニとあり て鳥獣も故郷を忘れぬ義

堅牢地神―佛經のある土地を護り玉ふ天の神

なり共、いつそつやは死んだ共、どふなりともいふてたも。其方を頼む、此儘に大坂に置てたも。國へは否じや」と手を合せ、拜み口説も哀れなり。傳内わつと聲をあげ、兎角も云はず歎きしが、「扨も〳〵淺間しや、口と心が皆違ふた。氏より育が恥かしい。華美はすは成身に染り、うはの空成世にならひ、親の事も古郷の事も忘るゝ程のお心には、いつ成果た情なや。心なき畜類も鳥は古巣を慕ひ、北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。鳥獣もそうはない。親ない者は身を樂に旅他國致せ共、親の墓へ參るとて百里貳百里戻るも有。此度御國の兄御樣、御知行拜領親御達は御隱居、髪を下して樂々と御法體の筈なれ共、おいとしやお母樣、つやが戻つて、二人の親が法體の顔見たらば、なんぼう殘り多からふ。ま一度髪の有顔を、おつやに見せたいばつかりに、惜からぬ頭の雪、解も撫るも子の可愛さ。早ふ連れて歸つてたも。傳内樣頼みます、と家來の我等に樣つけて待こがるゝ親心、私計すご〳〵と戻つて生てござろふか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人。堅牢地神のいたゞきに釘を打つとのをしへ有。釘は鍛冶屋が細工にて、打かねはなされまい。曲もないお心や。我等が母はお前の乳母、養ひ君の顔見んと日を數へ指をおり、待あこがるゝ母が心、思ひ遣れてお母樣の、御心底のいたはしや。則ち母御

生身は死身―
暖、生あるものは必ず死す

の御文」と、懐中より取出し、「此直筆を御覽あり、とつくと御思案あそばせ。私が腹立も皆お最愛さ故なり」と、泣つ叱つょ様々に詞を盡し諫めしは、奇特にも又哀れなり。小かんも母の文と聞押戴き、上書見れば、「おつや殿參る母より。此方無事」と書れしが、「お筆に年の老たこと、十五の年爰へ來て、八年おがまぬ親の顏、見たふなふて何とせふ。生身は死身若しひよつと、死病うけたり共、母様の懐しさに臨終も仕損ない、いか成恥も晒そふかと案じ過しする程に、親の事は忘れぬ、あんまり叱つてたもんな」と、文を顏に押當てきへ入たへ入泣きけるが、封目切て見たけれ共、文躰見たらば氣も落て、彌心が引れふず。平様に談合したけれども、襖一重が七重の關、一人の思案に落かねて暫案じて居たりしが、「いや〳〵口でいふは安い事、どふ成共間に合せ、今宵の所をのがれん」と涙拭ふて。小「アヽそふじや今とつくと合點した。親には思ひ替られぬ。此方をふつょと思ひ切、成程國へ下りましよ。伯母様も傳内も、今宵は歸つて明日早々」といふ中にも、起請文を取られじと、守袋を後手に、棚の戸を細目に明けそつと入れば、男も心得受取しが二人の心の危さよ。伯母傳内も悅び、「御承引忝なし。とてもの事に彼の男の誓紙を、只今破つてお見せなされよ」と云はせも果ず、小「ハァ思ひきるからは起請

は有ても反古なり。其上誓紙は男の方へ渡して、爰にはない」とぞ陳じける。「いや〳〵今迄懐中に守袋が見へました、ぜひにお隠しなさるれば、慮外ながら手をかけます」と、いへば男は襖の中、見付られては悪かりなんと、守袋を戸の間より小かんが袖に、振ひ振ひ返せしはいよ〳〵危ふき契りなり。「アヽ待や〳〵尋常に破らふ」と、守袋を解く中にも、「サア二世の固めの起請文、破るは佛神三寶の守めも切果た。片時も生て何にせん。合圖の最期は爰なり」と、襖戸棚に肋を寄せ誓紙を披き、「南無阿彌陀佛」と合圖の詞、さつと引さき身をすり付、待ども内より音もせず、「南無阿彌陀佛」と引さいては身を付、引さき〳〵男の刃今や〳〵と最後を待てど、内には疑ふ恨にや靜まつて音もせず。「エヽ死ぬることさへ叶はぬは、是が誓紙の罰ぞ」とて、寸々に引裂て　どうと伏して泣きければ、二人「ヲヽ尤も道理や、つれなふ云ふも身の爲」と、皆々袖をぞ絞りける。涙を留め漸〳〵と、少「アヽ氣が勞れて頭がうつ。母様のお文も見たし少と爰で休みたい。誰も人の來ぬ樣に、障子も閉て皆立て下さんせ」伯母「ヲヽ道理〳〵。傳内も端へおじや」と出ければ、少「申伯母様、平野屋へござんしたら、女夫のお衆傍輩衆、内外の者へも念比に、是から直に遠い國へ往まする。もふ此世では逢ますまい。年月の御念比忘れはせぬと、

頭がうつ―頭痛がする

つど〳〵に頼みます。伯母様も去らば」と、外に云ひさす襖さす、さすや障子の薄紙一重、見へざる事こそ是非なけれ。はや臺所も仕廻比丁稚起して、「こりや〳〵安治川の宿へ往て、明日明六ツに乗る程に、舟の用意せよと云へ。内衆頼む、七ツ過に駕籠二丁、安治川迄約束して囃はふぞ。伯母様は氣が盡きやう、夜食でもあがりませ」伯母「いやなふ此程胸がつかへて、夜食は思ひもよらぬこと。歸つて夫にも悦ばせ、明日見立に來ませふ」母「夫なら酒が能ござらふ」伯母「ハテなんの辭義があるものぞ、酒も何にもほしもない」闇夜を迎りて歸りけり。傳内も氣くたびれ、「内衆酒の燗しやれ。一ツ飲で寐みたし。しゆらいも書付あるならば代物遣ん」といひければ、心得たんぽを漬生姜、しほがひに花鰹、書出出し算盤に、暫らく時こそ移りけれ。伯母も宿へ行つく比、門を明けて立歸り、「なふ〳〵曾根崎の際迄往たれば、中町の方が騒しう、屋根へ上れのなんのと云ふ、手過ちか氣遣で夫故に戻つた」「ヤア心元ない」と、内の男は追々に走つて出る。傳内刀押取て、鉢巻引締め裾からげ、身ごしらへしつかと固め、實に侍の心掛奥へ入んとする所へ、内の者ども走り歸つて、「アヽ氣遣ない〳〵。盗人そふなが二人連、濱筋の屋根傳ひ中町の辻へおりて、福島の方へ走つたを道通りが見付て、聲を立て騒いだ

つど〳〵―毎々にて頼ふの義（俚言集覽）

ほしもない―昼にかく

しゆらい―雜用たんぽ―銚子と賈―燗をつける書出―鰹をかくにかく

分。お騒ぎなさるゝ事でない」と、いへ共伯母も傳内も、「先おつや樣起しませふ」と、連立ち奥に入けるが案の如く小かんはなし。「是は〳〵」と戸棚を明けつ、庭の隅々穿鑿すれば、著替の帷子引ほどき、庇のたるきに結びさげ、屋根へ越したに疑ひなし。「なふ悲しや小かんが居やらぬ」と、伯母が泣く聲落人ありと云ふ聲に、家内の男女驚き騒ぎ、「扨は今のじや、程はない。隨分追かけ、死ぬ先連て北野はあんまり近い。死んだら體を梅田は爰じや。町衆迄に御厄介、近比御無心長良へ走れ。八ッの太鼓がでん〳〵でんほあとが屋とやのいたみへいけだ、茶屋中組中駕籠の衆國の侍交りしは、鬼に鐵鎚煎餅屋の、伯母は小橋へ急ぎける。

北野―來た

梅田―埋め　長良―乍ち　池田―伊丹へ行　けだに皆いひかく

下の巻　平兵衛小かん夜ルのあさがほ

よそのつらねも我命も、一よぎり成うきふしや、憂身の果は主親の、ばちにかゝりし三味線の、二十二三の糸きれて、殘る一期も暫しぞや。いかに今年のから露も、哀れ袂のさみだれに、心は今も皐月闇、木の下闇にどまくれて、覺えし道も幾度か同じ所にまひ戻る、跡にたづぬる願立に、神や佛のひかへ綱、のばす命と知ばこそ、「アヽ是又元の道

よそのつらね―小かん心中の一節を尺八に合せて唄ふ　二十二三―年と三味線の二三の絲とかく

一二九十―数の分るゝ所の歌にて委しくは古寫本節用集にあり　早と―早くか

たい市云々―第一とたい市之丞とかく　笠屋云々―實説は搜奇錄一の卷にあり　魂魄―陽と陰とのたましひ、附形之靈爲魄、附氣之神爲魂（左傳）　もつう―半七の子　もゝ鶴與兵衛―卯月の紅葉にあり　小菊半兵衛―傳奇作書に出づ　金入一金を入れ

なるは、是も今來た道ぞかし。此世からさへ踏迷ふ。六道の辻覺束な。迷ふまいぞや」「迷ふな」と、泣くぞ迷ひの種ならし。あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七々の、七ツの知死期、最後も早と來にけらし。狼狽て白たへ潛る畠垣、仇の讐の朝顏も、今咲かゝる花の露、夫より先に凋む身は、明日のあさ日に此體、干ん曝さん淺ましと、縋る涙の龍骨車に、あひの水さへまかすらん。世の中に絶て心中なかりせば、冷泉一世の賴みもなからまし。誰か仕初し此契、音に聞きしは生玉の、それが初のたい市之丞、つれて男も名の高き、大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、つまとつまとを引よせて、結ぶ無常の薄けぶり、千日寺のはかなしや。別れし跡の寢姿は、歌夜中の鐘に目を覺し、母よ〳〵と乳呑子の、歎きを捨し修羅の道、魂は冥土に到れ共、魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや。此曾根崎に埋もれぬ、大坂三十三番に、名を殘したる順禮補陀落や、大慈大悲の誓にて、ついには兜率天滿屋の、お初も佛なかまかや。道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町つゞき、世は何事も難波橋、よしとあしとの境筋、中に立たる賤が身は、不便と思へ備後町。夫のみならず呉服屋の、手代半兵衛は彼の池田屋の、小菊にたんと金入なれば、心どんすな者でもないに、身のしゆすごしに氣はちり緬の、見世の

にかく以下皆かけ詞　殿子―鈍　繻子こし―仕過し　ぬめりんず―胡魔かす　羅紗―呼とびざや―飛ぶ　のり―糊と法

若草―二人の年若にかく

帳面皆ぬめりんず、らしやもないこと云はしやりんずの、はや人玉も飛ざやぬいて、共に刃の諸羽二重の、おなじ枕にふしつむぎ、重ね井筒の戀の水、結び汲む手は多けれど、色は樣々紺屋染、胸はもゑぎに紅ひはだ、さやけき色は是ぞこの、とくさに染てさしも實に、心中みがくゆかりかや、花紫に薄淺黄、桔梗花色地白型、紺屋ののりの道廣く、到り先立つ此人々を、今身の上の智識ぞと、賴む外には菩提をも、若きは別ちあら人神の、天滿の方に見ゆる火は、我を尋ぬる提灯か、野邊の螢か神の御燈か神垣や、神明宮にお暇の、後世は鳥居の二柱、二人離れず立添へど、こぼす涙の雨にさへ、千代の老松つれなくて、地水火風の若草は、因果の嵐無常のわけ、時を別たず時ならぬ、夏の枯野に迷ひたる、あかつき露に身もひたれ、帷子裾に纏はれて、歩みかねたる二人が躰。平「是なふ十里も來たる樣なれど、まだ爰に行吟は爰で死ねとの神明樣の、敎ならめ」と泣きければ、少「アヽあの町は老松町、伯母樣の家も二三町。伯母樣の近くで死したらば、緣に引れて後の世は、親にも逢に藍島」藍より出て藍より青く、罪より罪の重からん、來世を待つこそはかなけれ。男髮剃取出し、「扨も因果な身の果やな。人は高きも賤しきも、死しては出家の髮剃を、頂くものに極まるに、その髮剃で死ぬるかや。生國は大和たは

らもと、幼少で二親に離れ、今は在所の兄より外、一門眷屬一人もなし。鍛冶屋の鎚の一本立。親兄弟共頼みたる、親方には勘當うけ、我身ばかりか和女迄、殺して一家に憂をかくる此科は、地獄の火焔に鞴かけ、無間の底の鐵床にのせられ、呵責の鎚に骨々を打碎かれんは今の事。よし夫は厭ね共、和女は國の弔ひうけ、六道の辻の憂別れ、是が今から悲しい」と、縋り付てぞ泣居たる。少「アヽ憂いこと云ふて下さんすな。私とても親伯母の心を背き歎をかけ、幾せの罪をつくりし身が、よい所へはよも行くまい。無間奈落の底迄も此手は離さぬ、こな様も私が手離して下さんすな」と、互ひに引よせ寄せられて、抱あひてこそ口説けれ。母様のお文をも來世で讀んと肌につけ、封目も切らね共、親子は一世冥土にて、呵責に逢ば目も眩み、妄執の雲に文字消て、讀むも此世の名殘ぞと、親子の緣も封目も、切て披きし文の中、「是なふ熨斗と昆布とに節分の、まめで下れの祝ごと、今が冥土の門出と、御存じないか悼はしや。母様常が血の道持、長文書く事お嫌ひが、子の可愛さかこまぐ〳〵と、舟の中息才にはやく〳〵下り、待祝ひら〳〵とあそばせし。父様今年は丁七十の賀の祝義、一門衆の振廻も和女下りを待受て、生御魂の祝ひ一所にと盆迄延すと書れしが、盆には我も新精靈、親子の盃みそはぎの、露の手向

まめ—豆と鍵金とかく

みそはぎ—濕地に生ずる植物に

て盆に必ず此草佛に手向くを

夢ちがへ―悪夢を辟邪に返す咒あちちなのかるやのさきに立つ鹿も誓へなすれば向ふとぞきく（秋齋閑語）

と引かへて、戴く我は草葉の影、さぞ父母のお歎きを、思ひ遣れて情なや。何事も〳〵、追付目出たくめもじにて、申まゐらせ候〳〵めで度かしくと止られし、是がなんの目出度いこと。子を祝ふ親心、無下になしたる身の罪科は、先の世からの約束か。二枚重の御文を、金水引にて綴られし水引の紅落て、おつやと云ふ字は血に染みたり。子の血は親の血の別れ。血筋が教へて此如く、先へ知らせの有からは、今の最後を物の告、さぞや夢見が悪からふ。明日は占ひ夢ちがへ、違へても祈りても、返らぬ後の悔言。いとほしの父母や、名残おしの伯母様や」と、文を抱締め肌につけ、悶へこがれて泣きければ、男も共に伏沈み、「皆此歎きは我故」と二人が膝にもたれあひ、咽返りてぞ歎きける。小「あれ〳〵明星様も高々と、明方に程はない。此文口にくはへて未來迄も持まする。最後の苦患に離れたら、含ませて下さんせ。念佛も心で申。こな様口で高々と、勸めて殺して下さんせ」と、文ひん捲てしつかとくはへ、兩手は合掌心に念佛、顔で髪剃教へつゝ早ふと急ぐ目元にも、可愛男を見をさめの涙は玉を列ねたり。それも今を限りの詞、「さあ」とばかりに振あげて、見れば目も眩れ二目共、塞ぎうつぶき「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」を力にて、襟引よせて髪剃の、柄迄ぐつと一刀、突れてうんと反返り、三重の

のたうつ―蠍の虫が蠍く如くも

たうつ藍の虫の息、苦む躰に氣も迷ひ、「かはい〳〵ア、かはい」と、共に苦む男の心、「南無三寶後れじ」と、落たる文をくる〳〵卷、口押割て含ませ、髪剃押取り、喉のめぐりを切さき〳〵、續くは首の骨ばかり、刀で切たる如くなり。その髪剃の返す刃を、我喉笛につく息も、いる息もはや絶々の、おなじ枕に死出の山、しでの田長かほとゝぎす、きゝに北野の藍ばたけ、藍に染めたる魂魄と、回向に色をぞあげにける。

がく

つく息―突くに
出死の田長―時鳥にて冥途に通ふ二人の魂に喩ふ